Marvel戦争記　第一章

帰宅部長θ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｍａｒｖｅｌ　Ｃｏｍｉｃｓに登場する人気ヒーローたちが世界平和のために様々な強敵に立ち向かっていく、、、が中には個性的すぎるヒーローがおりヒーロー同士が戦ってしまうこともある様である。さあはたして彼らは強敵から世界を守ることはできるのだろうか、、、。

目　次

ＶＳベクター編　第０話　ヒーロー結成！　名は、、「アベンジャーズ？」 ―― 1
ＶＳベクター編　第一話　ヒーロー会議 ―― 3
ＶＳベクター編　第二話　突然の奇襲 ―― 7

ＶＳベクター編　第０話　ヒーロー結成！　名は、、

「アベンジャーズ？」

「トニー、あなた宛てに手紙が届いているわよ」

助手ペッパーが明るく言う

「手紙？電子メールのほうがウェルカムだったのに。」

トニーはそう言い手紙をもらい読もうとするがすぐに突き返した。

「これは僕宛てじゃない。そうだ。僕はＴＶに出たりラジオに出たりで忙しいんだ。これを読んでいる暇があったらたくさんのマスメディアに出たほうが断然得だ。」

新しいスーツが完成し上機嫌だったが、その機嫌はこの一通の手紙で損ねられてしまった。

「トニー。最近そう言って何にもこたえてないじゃない。こんなんじゃあ心のない鉄の塊だわよ。」

それに付け加え

「スターク様、私はこれを読んだほうが得策だと思いますが。」

「ジャービスまで…。」

「こちらを書いた方はこの手紙を同じ時間にこれのほかに五通出しております。何かのチームの結ｓ…」

「わかった。読むよ」

あきらめたトニーは仕方なく読んだ。

―トニー・スターク様―

あなたをアベンジャーズの一員として招待します。

「アベンジャーズ？なんだそれ。ネーミングセンスに問題があるのでは？僕だったらもっとカッコいい名前にしてたのに。たとえば『ハイパーピース』」とか」

「トニー。あなたののほうがずっとダサいわ。」

ペッパーがあきれた様子でそういった。

「まあ行ってみる価値はあるらしいしな。これで後悔したら責任とれよ。ジャービス」

「私には責任をとる能力はありまｓ…」
「また逃げた。」
　彼はその言葉を残し、自家用ジェットで集合場所に向かった。
「そろったようだな…。まったく…。」
　濃い髭に坊主頭で眼帯を巻いた黒人がそういった。
「僕の招待状には個性の強いやつらがくると聞いていたが、これには少し度というものがあるんじゃないのか？世界の中でも五本の指に収まる大富豪、緑色の物理学者、女スパイ、アスガルドの王、タカの目。」
「緑色って、なりたくてなったわけじゃない！」
　金髪のガタイのいい男ともじゃもじゃ頭の白衣を着た男が言い合いをしている。
「それより、俺らを招集したのは何か理由があるんだろ？」
「アスガルドの王を招待するレベルなんだろ？」
「そもそも私必要かしら？」
　それほど特徴のない男と金髪のゴリラ顔、さらにひょろひょろの女が口々に言う。
「ここに集まってくれたことに感謝する。だが全員が集まるのにこれほど時間が必要か？会議を始める時間を１１：００からといったのにこうして会えたのが１７：００だぞ。お前たちは時間にルーズすぎる！だいたｉ…」
「ベラベラ言ってるけど、会議室とかちゃんと整備しているんだろうな？自分のこと棚に上げて説教してたらこの招待状破くぞ。」
「おちつけスターク。」
　そう金髪の青年は言った。
「クソ！なんでこんなやつらと…。だいたい世界を守るのは僕一人で十分なはずだ！どんな強敵か知らないけど僕が必ず勝つ！」
「口が悪いぞ、スティーブ。」
「…まぁとりあえず、その会議とやらを始めたらどうなんだ？ニック」
　もじゃもじゃ博士が眼帯の黒人にそういった。
「そうだな。それあえじゃぁ会議室に案内する。」

ＶＳベクター編　第一話　ヒーロー会議

「ということで会議を始める。君たちにここに来てもらった理由は紛れもない『地球規模の戦争』が起こりうるからだ。それも相手は極悪犯罪者ではない。そもそも地球人ではない。インベーダーが相手だ。そこで、世界的に活躍している君たちを集結させて退治しようと思ったわけだ。と同時に、改めてになるが、今日から君たちを『アベンジャーズ』とよぶ。」

「『アベンジャーズ』はダサくないか？僕だったらもっといいのを考えれたのに…もっと、『スーパーバスターズ』とか」

　トニーが口をはさんだ。

「そっちのほうがダサいと思うよ。」

「まあとにかく、メンバーを俺から紹介させてもらう。まずアベンジャーズ総司令部はこの俺、ニック・ヒューリーだ。んで、そこの大富豪はトニースターク（アイアンマン）だ。」

「『そこの』はないだろう。『そちらの座席にお座りになられてる』だろ？ちゃんと言おうな。」

「私のほうが立場が上だ。命令はするな。そこの盾を持ってる金髪がスティーブ・ロジャース（キャプテンアメリカ）。そしてそこのもじゃもじゃ頭の天才物理学者がブルース・バナー（ハルク）だ。んでその隣に座っている女がナターシャ・ロマノフ（ブラックウィドウ）。さらにハンマーを常日頃持っている男が、ソー（マイティーソー）。そして残ったこの男がクリントン・バートン（ホークアイ）だ」

「聞いてるとやっぱり僕の説明雑じゃないか？ニック。」

「とりあえず、紹介が終わったところで、詳細を説明しよう。ミセスポッツ、入ってくれ。」

　そう言われはいってきたのはペッパーだった。

「ペッパー？なぜキミがここにいる？留守番は任せたはずだ！」

「こんな大富豪の済む要塞に留守番が必要かしら？」

　そう言い返すと

「万が一のことがあったら？」

「あら、あなたが自分の作ったものに対して不安を感じるなんて。それとも私のことを心配してくれてるの？」
　ペッパーは笑いながらそう言った。
「夫婦漫才もいいが話をしてくれ。ミセスポッツ。」
　ニックはすこし焦ってそういった。
「ごめんなさい。ニック。それでは今回このアベンジャーズ結成に至った経緯を詳しく話すわ。まず、問題のインベーダーはダークジェイン軍団と名乗っているわ。そしてその軍団の親玉が『ベクター』。」
「ベクター？それってもしかして…」
　ソーが焦って聞き返す。
「んん？神様が焦るなんて、らしくないな。」
　スティーブがそう言う。
「焦るのも無理ないわ。だってコイツは彼の故郷『アスガルド』を滅亡させかけた原因を作った張本人だもの。」
「キミのそのハンマーだったら一発だったんじゃないのか？」
　トニーは若干からかったように言った。
「残念ながら無理だ。おれは別の星に出向いてた。」
　ソーは冷静に返した。
「話を続けるわ。彼の目的は地球のどこかに存在する『キャンベルンストーン』をほしがっているの。でもそれがどこにあるかが全く検討が付かないの。」
「それがある場所を指し示すものを作ればいいじゃないか。」
　バナー博士がそう言った。が、
「ごめんなさい。博士。残念ながらできないの。」
「なぜ？その石に構成されている物質とかわかるだろう？」
「それが…」
「無理だったわけか…。」
　場が静まった。
「…それでそれが見つからなかったら、この星を丸ごと消すそうよ。」
「破壊活動はいつから始める気だ？」
「一週間後よ。」

「なぜもっと早くから対処してなかった?」
バナー博士とトニーは口をそろえて怒った。
「実は三年前から、この活動はしていた。探そうにも探せなかった」
「連絡を取ればいい話だろ!」
「それができればこんな緊急事態にはならなかったとおもうぞ。」
バートンが口をはさむ。
「とりあえず君たちにはこの飛行空母艦で一週間厳重な監視下においておく。」
「全く…。面倒なものに首を突っ込んでしまった。来るんじゃなかった。」
トニーは嘆いた。
「ちなみに、この空母艦の名前は?」
バナー博士がニックに聞く。
「名前は特にない。つけたいのか?」
「つけたらいろいろとやりやすそうだしな。」
ソーが言った。
会議が終了した。結局空母艦の名前はバンデル号になった。由来は「束になって戦う『束』」から来た。初日から情報量が多くさらに一日で多くの覚悟を強いられたが誰一人抜けようとしたやつはいなかった。
食事の時間が来た。メンバー全員、予想以上の豪華さにかなり驚いていた。
「君たちにはかなりの負担をかけてしまった。だから、このようなときぐらいは、盛大なものをしなくてはならないからな。」
「これ全部ニックがやったのか?」
トニーは驚いたように言った
「私だけではないがな。食事が終わったら、終わってるヤツもいるかもしれないがこの空母艦の探検をしてくれ。どこに何があるのかをしってほしいからな。」
「それならもうジャービスがここにこいた瞬間にスキャンした。もうみんな済んだ。」

トニーは得意げにそう言った。
「それでは皆、自由に食べてくれ。」
ニックはそう言い放つと指令室に向かった。

ＶＳベクター編　第二話　突然の奇襲

どうやらニックは指令室に呼ばれたそうだ。国際連合からの連絡が入っていた。
「ニック。体調はどうか？…じゃなかった、アベンジャーズの皆は大丈夫か？」
国際連合事務次長のアルバートワトソンだ
「ええ、まぁ。クセの強いやつらばかりで最初からかなり手間取ってます。が、安心してください。このニックヒューリーが必ず地球を彼らと守ります。」
「あぁ、頑張りたまえ」
ブツッと回線は切れた。
が、その途端に
ドーンっ!!
「何事だ？」
立っていた者全員が床に転げた。もちろんバキング風に楽しんでいるヒーローたちもだ。真っ先に気づいたのはジャービスだった
「空母艦の外に生体反応あり。人ではありません。スターク様。おそらくダークジェイン団のボス、ベクターと思われます。」
「オイオイ、どうなっている？一週間後じゃなかったのか？」
トニーが若干切れ気味に言った。
「ペッパーさん？どういうことですｋ…」
バナー博士がそう言いかけたとたん
「皆、落ち着くんだ。よく話を聞いてくれ。嘘情報を流したわけじゃない。おそらく…時間を間違えたとか」
「冗談を言う暇があったらぼくたちに命令をくだせ！ニック！」
スティーブが怒った。しかしもうすでに彼はキャプテンアメリカになっていた。
「とりあえず、外に出て誰なのか確かめたほうがよさそうだな。」
「その必要はないようだぞ。」
バナー博士が言った。

「なぜ?」
トニーが聞き返した直後
パリーンっ!!
敷居のガラスが割れた。そして何者かが姿を現した。
「なにものだ?!お前!」
キャプテンアメリカはそう言い放つと
「私の名はダークジェイン団の三大幹部『エメラ』だ!ベクター様はせっかちなもんでして、お前たちの生体反応をキャッチして飛び込んできたわけだ。」
「おいおい。こんなところで、上司の悪口言ってたら首が飛んでっちまうぞ。」
トニーは言った。そして空いたガラスから鉄の物体が彼に飛んできた。そしてそれを彼は装着し、アイアンマンになっていた。
「ほう、なかなか面白うそうなものを見せてくれるな。だがお前のそれじゃあ俺を倒せない。」
「周りを見てみたらどうだ?俺一人なんて空気じゃないだろ?わかｒ…」
グァァァァ!!!
アイアンマンの声をかき消すように唸り声が上がった。ハルクだった。
「ほら、破壊神がお目覚めだ。お前はこいつに喧嘩を売ったようだな。残念ながらもうお前の負けだ。こいつは最強、んまあ俺らもお前を退治するのに手は貸すが。」
アイアンマンのおしゃべり口が炸裂した。
「それじゃあいｋ…」
キャプテンアメリカが言いかけて、ハルクは飛び込んでエメラを殴打した。
「──っ!!強い!だが私も負けてられない。」
そういって、エメラは大群のインベーダーを呼び込んだ。
「おい、聞いてないぞ。こんなの!何の真似だ?」
アイアンマンがそう言い放つと

「スターク様、遠隔操作式のアーマーを呼びますか。」
「もちろんだ。四体出せ。」
そういった直後にものすごい速さでまた鉄の塊が四つ飛んできた。
「いいものを持っているんだな！んじゃ僕も」
そういってホークアイは弓を構えた、がその直後後ろから
──Ｉ　ｃｏｎｔｒｏｌ　ｙｏｕ──
そういい放たれ、ホークアイは倒れた。
「クリント！大丈夫か？しっかりしろ！」
そう駆け寄ったのはキャプテンアメリカだった。が、その直後に
「お前を殺す」
ホークアイはそう言い彼を殴り飛ばした。
「クソ！どういうことだ！何をされたんだ？バートン！」
キャプテンアメリカは戸惑った。それもそのはず、さっきまで一緒に夕食をとっていた仲間が突然自分を殴り飛ばしたのだから。が、キャプテンアメリカはホークアイを傷つけぬように攻撃をかわし続けた。
「クッソぉ！やられてばかりじゃないか…。」
キャプテンアメリカがそう嘆いたとき
「何あきらめている、キャプテン！今はこいつらを倒さなくてもいいのだ！全力で追い払えばいいんだ！とりあえず立て！」
ソーはそう言い電撃をまき散らした。
「…っわかった！ナターシャ！手は空いているか？」
「ダメだわ。こっちも結構きついの。喋るだけでもキツいわ！」
ブラックウィドウは二体の雑魚の関節をねじ伏せながらそう言った。
「これじゃあらちが明かない！クッソ！どうすれば…」
「スティーブ、クソは禁止な！」
「無駄口をたたくなら仕事をしろスターク！」
結局、破壊活動に飽きたのか、襲撃してきたエメラ達は退散していったが、ホークアイも一緒に行こうとしていた。
「バートン！どこに行く気だ？」

キャプテンアメリカが焦ってそういったが、彼の耳には届いていなかった。そしてエメラが
「この弓使いは俺らの仲間になったそうだ！残念だったな！」
襲撃されてやられっぱなしだったヒーローは心も体もズタボロだった。
「なんでバートンはあっちに行ったんだ？」
トニーはそう言った。
「おれは見たぞ。アイツ、敵に何かされていた。」
ソーが言う。
「おそらく、『マインドコントロール』だ」
どこから現れたのか、ニックがはさんだ。
「マインドコントロール？」
皆は口をそろえて言った。
「おそらくあいつはだれかに後ろをつかれてマインドコントロールをされていたんだろう。とりあえず、ヤツらを追うぞ！」
スティーブはそう言ったが、
「その前にやることがあるだろう。」
トニーがはさんだ。
「やること？」
ソーはわかっていないようすだったが、
「ハルクがいないわ！」
ナターシャが焦ってそう言った。
「あいつを止めないと空母艦より先に地球が終わっちまうぞ。」
トニーがふざけた
「ジョークを言ってないで、早く行かなければ」
キャプテンアメリカがそう言いながら空母艦を飛びたった。